

西沢 赤子（にしざわ・せきし）

1、プロフィール

大正中期、新傾向俳句で出発、次いで青森の松涛社、石楠系の「ほそみち」、戦後は「暖鳥」に参加するという多彩な句歴を持つ。画家の目でみた発想、放胆な句風をもつ。

<生没>

1898(明治 31)年 12 月 22 日 ~ 1983(昭和 58)年 12 月 9 日

<代表作>

句集『花おこぜ』

<青森との関わり>

青森市、東津軽郡で小学校・高校に勤めながら画業に励み、その普及にも尽くし、昭和 53 年県文化賞を受けた。

2、作家解説

本名俊蔵。明治 31 年 12 月 22 日青森に生まれる。大正 6 年青森中学校卒業。7 年油川小学校に勤め、以後 12 年から昭和 6 年まで青森市菟町小学校、浦町小学校を歴任。17 年以後高校の非常勤講師などの教職につく。油川小学校時代の教頭、後に北海道に住んだ沢山砂中金(中塚一碧楼門)の指導で俳句を始める。5 年「寂光」(松涛社)の同人となる。「髪ぬれて女等よ散る花に吹かれ」5 年、「秋の蚊をたゞきすぎにけり」6 年、「開き継ぐ花火の空に何もなし」6 年、などがあるが、これは画業の東奥展特選「御す」の進境に対応している。

8 年、青森の俳誌「ほそみち」(臼田亜浪の石楠系、他の同人斎藤草村・花田哲行ら)に入る。「群雀枯野の雨に追はれたる」10 年、「我もはや不惑に近く董摘む」12 年、などがあり、同派の傾向を伺わせるものがある。第二次大戦後、21 年創刊の「暖鳥」に参加、「昆虫どもの殖えるこの頃吹芽がいとし」21 年、「壺の追求画面をなさで火に埋むる」23 年、「夏枯れの気球が浮かび街横とう」34 年、などの

句風を示す。40、50年代に入り「かなかなや日本列島のこぼれ島」41年、「向日葵の一軸咲いて仁王立」53年、などの句境を示すが、この時期は画業に対し、47年青森市文化賞、53年県文化賞を受けたのに対応する。50年、句集『花おこぜ』が出た。自選239句を収める。昭和58年12月9日急性心不全のため青森市浦町奥野250で逝去した。59年9月の「暖鳥」には同人の追悼文が多く載った。成田千空の「即吟派で本音を吐く、一茶系の俳人」という評がある。

3、資料紹介

○『花おこぜ』

図書

1975(昭和50)年7月1日

240mm×130mm

青森俳句会発行。県句集第一集(昭和5年)から三十五集(昭和49年)までの中から239句を選び、他に画賛の句4句を収める。絵かきとして教師として生きてきた折々の感懐を率直に詠んだ句が多く、赤子の人間と生活が滲み出ている句集である。